針葉樹会報

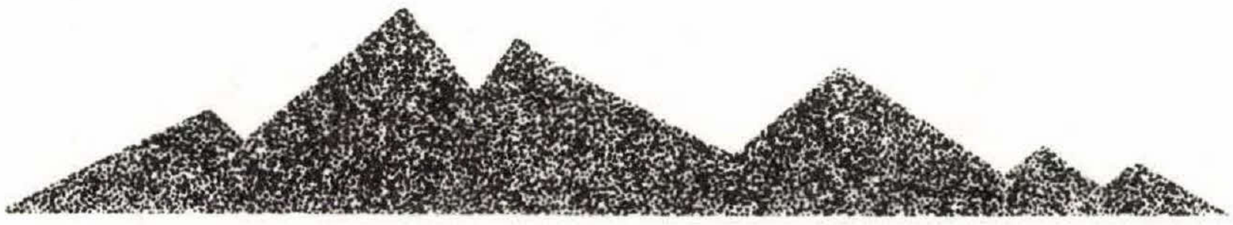
1987.6.　第69号

表紙写真説明

守門岳にて

（撮影・佐藤　活朗）

発行日 1987年6月24日 発行所 針葉樹会 印刷所 篠田印刷	針葉樹会報 第69号	編集人 〒167 杉並区南荻窪 3－29－23 引地　真



― 目　次 ―

志賀坂峠・諏訪山・八丁峠……柿原　謙一　2
尾瀬春スキー行……浅田　充　3
南十字星のもとで……西牟田伸一　5
三月の守門岳……佐藤　活朗　8
懇親山行記（金峰山）……宮下　克彦　9
ネパール・トレッキング留意点……白石　章治　11
会務報告……16
編集後記……17

志賀坂峠・諏訪山・八丁峠

柿原　謙一

望月（達）さんから、志賀坂峠の南稜にある諏訪山（一二〇七m）はいい山だ、ときいていたので、一九八二年四月下旬に訪れた。そのときそこからさらに南にせりあがって、八丁峠—赤岩峠間の小突起に至る痩せ尾根を仰いで、これはいつか登りたいと思った。

ところが今年（一九八六年）の一二月中旬、偶然にもそれを果たせた。秩父の山友が、西上州の笠丸山に行きたいと私に同行申出があった。これは望月随筆「笠丸山」（『静かなる山』所収）の影響なのだという。峠ごしの日帰り予定で出発したところ、三山谷の霜道でマイカーのスリップ事故を目撃し、志賀坂峠北側の降りは要注意だね、ということになる。しからば諏訪山↓八丁峠へ、と行先を変更した。なおこの諏訪山は、浜平鉱泉から登る諏訪山とは、別の山である。

志賀坂峠のすぐ下に車を留め、峠に立つ。稜線を南へ辿って諏訪山△で昼食。ここから浅間山やたっぷり冠雪した北アルプス（乗鞍—穂高ならん）が、よく展望できた。二子山の東岳・西岳の姿も見事で、西上州の八倉部落や八倉峠もなつかしかった。おかげで住居附の谷の見当もつき、笠丸山はアレだねと手をかざす。

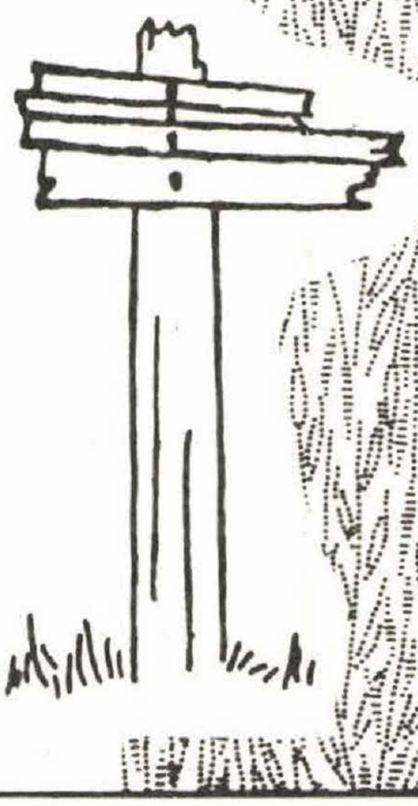
はじめて諏訪山にきたときには、倒木もあり藪もあったのに、この度は道がよく整備されており、中里村で手を入れたのだろう観葉植物まで道ばたに植えられている。

さてここから八丁峠—赤岩峠（埼玉・群馬県境）へと、大小突起のある痩尾根を登り降りする。しかし、山路は明瞭で路探しの必要はなく、やがて奥秩父特有の原生林となり、午後二時には道標にであった。ここで八丁峠と赤岩峠への山路が分岐するのだった。仰げば県境線上にある急峻な突起ごしに、秩父側の空が光っていた。

この原生林は実にいい。そそりたつ小岩壁や足もとには、青い苔がほしいままに育っており、踏む登山靴の下に弾力がある。奥秩父先従者が辿られ、そして今はなき秩父のメインルートに在りし面影を偲ぶに、充分な山相であった。

だがこの道標から八丁峠へのルートは、まことに判らない。左（東）へは辿りにくい箇所があり、結局右より（西より）に登り、すぐ左よりに転じて、頭上の突起を捲くこととなる。

小暮さんや田部さんの山旅が、私の胸にうかんだ。試行錯誤しつつ県境尾根に立つのに一時間を費やした。つまり突起の東側にでて、



明白な山路にお目にかかれた。これだけの彷徨だったが、路をえた私は大島亮吉さんの「道のありがたみを知っているものは、道のないところを歩いたものだけだ」が、胸にきらめいた（『山』所収の「小屋・焚火・夢」）。

間もなく八丁峠に着き、少憩して四時頃に坂本へと降りだした。この降り路は一九二八年の夏休みに、嵐の中をおりた少年期の私に、忘れられない峠路だった。六〇年近くたって、またこの路を辿れたとは。

高度九〇〇米前後にある標示大岩地点で車道にでた。これは志賀坂トンネルに至る舗装道である。車を駐車してある場所に着いたのが五時半。仰げば空に月とむら雲があった。少憩して一同秩父市へと出発する。暗い車中での会話中、今日のコースはヤシオツツジ（ゴヨウツツジ）もきれいだろうね、と誰かがつぶやいた。

（一九八六・一二・一四）

尾瀬春スキー行

浅田　充

実に旨いビール。至仏岳（二二八二m）の頂上で飲むビールは、都会では味わえぬ久しぶりの、三時間の山の鼻からの直登後の、苦労した後の味わいだ。昨日（四月二八日）二時四五分上野発の通勤電車に乗り、沼田駅にて夜行接続の一時五〇分の東武バスに乗り換えて、途中至仏スキーへ行く群馬山岳会の人のボンゴに乗せてもらって、鳩待峠を越え、山の鼻に着いたのが二九日九時。そこで、テン張って、スキーを担いで、一面の雪だが、春爛満の雰囲気漂う至仏の純白の斜面を登ってきた。

天気は快晴。これ以上望むべくもない好日。北は、越後三山、西は巻機、谷川、南は上州武尊がくっきりと見え、尾瀬原を挟んで、燧岳（二三六〇m）がどっしりと容良く、構えている。頂上で一時間の小宴会の後、スキーを着けて、標高差八〇〇mの至仏北斜面ムジナ沢に向けて滑降する。

雪質はザラメで、又斜度もあるため、結構

気持ち良く春スキーを楽しんだ。このスキー行の立案時に、兵藤氏を誘ったが、あいにく同行できなかった。スキー好きの兵藤氏が来たら喜ぶだろうなと思う程立派なゲレンデだ。二〇〇～三〇〇m下っては、一息つき、十分に周囲の雰囲気を楽しみつつ、ざっと三〇分でテントまで滑り降りた。

尾瀬原への降り口は、林間コースだが、樹木の周りは、しっかりと雪がついていて、快適に滑り下りる事ができる。テントは至仏山荘の至仏岳寄りの雪原で、四張りのテントがあるだけだった。ここには、G・Wは未だしという感じだった。同行の隅田氏（早大ハイキング部OB）の提案で、山の鼻ロッジをバックに、これ又ビールを片手に記念撮影。後で夕食をとりながら、話を聴くと、この山の鼻ロッジが、隅田夫婦の愛の始まりであったとの事。

その夜の夕食は、これ又スゴイ。霜ふり和牛ステーキ、ビール、男山吟醸酒、冷酒……と久し振りの山の晩餐。ようやく八時頃眠りについた。やはり寒い。初めて雪山に行った大学一年の爺岳のテントを想い出した。あの時とは違って、テントは上席、シュラフも羽毛、まして五月の春なのに。よく考えてみると、雪の上で寝たのは、大学を出てから初めてだった。

翌日、尾瀬原を越えて、尾瀬沼長蔵小屋に向かう。尾瀬沼は川筋を除いて、一面の雪原で、ジルベレッタが快適に滑ってくれる。背中に至仏を背負い、燧を正面に迎えて、双方の距離が片や近づき、片や遠ざかりで、色々な大きさで二つの山を十二分に楽しむ事ができる。おまけに昨日に続いて、今日も雲を探しても、一向に見つからない快晴。半ソデTシャツにサングラス。やあ実に快適。下田代十字路に一時着。ここに山荘は尾瀬山荘を始めとして四つ程あるが、除雪機を使って、小屋開きの準備で忙しそうだ。ここで昼食を済ませ、白砂の乗越を越えて尾瀬沼へ。燧の東北をまく峠だが、思ったよりも長い登りだ。

尾瀬沼沼尻に着いたのが午後四時。ここの沼尻の長蔵休憩小屋も、赤ん坊をござの上に遊ばせて、小屋開きのための除雪をする若い夫婦に会った。こういう生活もあるんだなあ、と少々羨やましく思ったりした。長蔵小屋に着いたのが午後五時三〇分。尾瀬沼は氷が薄くなっていて横断できず、岸の氷の厚そうなところを滑走してきた。

長蔵小屋に着く少し手前でやっと、念願の氷上横断ができ大満足。長蔵小屋裏の今山行最後の夜は、S氏特製のインドカレー。彼は今秋、インド駐在となるとの事で、カレーの味には一家言あり、この夜もビールに始まって、モーゼル一九八五年もののワインでしめる。昨夜につづく宴会。夜遅くまで春山の宵を楽しむ。翌日、三平峠を越えて、大清水へ向った。峠は十分雪に覆われて、スキーツアーが楽しめる下りの滑降。大清水に着いた時には、雨がポツポツと降り出した。実にタイミングが良いというか、日頃の精進のお陰とお互いを称え合った。

ここでも又、岩魚の塩焼とビールで、今山行の有終の祝盃を上げた。S氏はこのあと、清水部落の山荘に向かうとの事で、沼田駅で別れた。最後に今回の山行で消費した酒の量は次の通り。日本酒（男山）一升。ワイン一本、ビール（ロング缶）一二本。

南十字星のもとで

西牟田　伸一

会員諸兄には長い間御無沙汰しております。小生八二年の九月以来仕事の関係でオーストラリアに滞在し、昨年五月に帰って参りました。本稿では近況報告として、主にオーストラリアでの体験、感じた事を中心に報告致したいと思います。

(1) 仕事のこと

私は化学メーカーの経理部員として過して来ましたが、派遣されたのは、ビクトリア褐炭液化社と言う、日本政府のプロジェクトを請け負う為に設立された現地法人です。これはオイルショックに端を発した、日本の長期エネルギー対策の一環を成すもので、他に鉄鋼メーカー、商社、石油会社により構成された寄合い所帯です。プロジェクトの源資は石油税であり、内容はビクトリア州のラトローブバレーと言う地域に豊富に埋蔵され、採取が簡単な、しかし水分を多量（重量比三分の二）に含む為輸送に適しない褐炭を、高温高圧下で水素添加する事により液化し、未来のエネルギー源としようと言う壮大なものであります。

この方法は原理的には第二次大戦前のドイツで実証されていましたが、採算を考えれば大変な規模が要求される為これまでは余り顧みられなかった分野でした。もっともプロジェクトのねらいも商業化の目処をつける為のパイロットプラントどまりであり、商業化プラントの最低規模として想定されるものの五百分の一程度です。

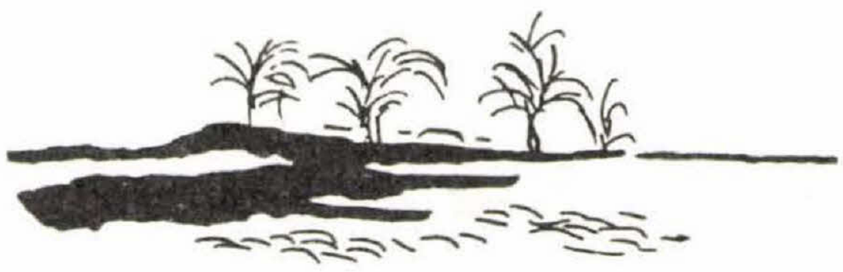
私の任務は主に三ケ月に一度の日本政府への支出報告であり単調な任務でしたが、扱う金額が年に六〇～八〇百万豪ドルもありましたので緊張はしたものです。

(2) 現地の状況

私の住んだモーウェルと言う町は州都メルボルンから東へ一五〇kmのところにあり、はるか一千km続くオーストラリアンアルプスの最南端マウントボウボウ（標高一五八〇m）のふもとの炭鉱町です。ラトローブ・バレーと言うと谷間の町と言う感じを持つかも知れませんが、北のマウントボウボウと南の丘陵地帯までは二～三〇kmも離れており、間を流れるラトローブ・リバーは川幅二～三m、水深五〇cm程の小川でしかありません。

このバレーには大きな町がモーウェル

を入れて三つあり、それぞれの町に広大な褐炭田と発電所が有ります。気候は温帯ですが（緯度は仙台程度）夏は乾期、冬は雨期と明確に区別出来ます。極めて乾燥していますから、昼間四六度にまで上った夏の夜も毛布なしで寝るのは危険な程冷え込みます。冬は結構冷えますが、平地で零度を割ったり雪の降る事はありません。マウントボウボウは車で二時間あれば頂上附近のスキー場に行く事が出来ます。



南半球の夜空に輝く南十字星は、日本からの訪問者にとって一度は見てみたいものです。夜、南の空をながめると、それらしく輝く四つの星が見えます。それが南十字星だと思い込む人が多いのですが、それは「ニセ十字」と呼ばれるものです。本当の南十字星は天の川のそばで少しつましやかに輝いています。私は日本から客が訪れるたびに「ニセ十字」と本当の南十字星を指し示したものでした。

モーウェルの人口は一万七千人と言う事になっています。（もっとも国勢調査も住民登録も選挙人名簿もない国ですから当てにはなりませんが。）その中に日本人が家族も含めて二百人も移り住んだのですが、それ程の混乱はなかったように思います。豪州人は一般に気が良く、親切で特に新しい隣人には協力を惜しみません。ユニオンになった時の理不尽な態度とは好対照です。

人口の構成はイタリア・ギリシャ系が圧倒的多数で町のレストランも安い所はこの系統になります。中華料理屋も安いのですが、どこへ行ってもマレーシアン系統で何を食べても同じ、甘すぎる味でした。

(3) 現地での生活

私は女房より二ケ月早く着任致しましたが、単身時代の生活は悲惨なものでした。一軒の家を与えられ会社への通勤は誰かが拾ってくれるのですが、車の運転が出来ない私は、休日にしか出来ない食料の買出しに大変な苦労をしました。

女房子供が来て、車の免許を取ってからは、生活技術、生活の楽しみ方も飛躍的向上を遂げました。最初のうちは近所の有名な観光地に毎週出掛けましたが、そのうちに飽きてしまい、あとは専らメルボルンのお祭、フットボール、競馬見物に週末を費しました。最後の半年間は近くのゴルフ場のメンバーとなり足繁く通ったものです。メンバーフィーは半年間七五豪ドル（現レートで七千五百円）。他にはボール代（ゴルフ場にたむろしている子供からロストボールを買えば六個一豪ドル）ぐらいのものですから、日本のゴルフの百分の一のコストで済みます。

現地の食事も充分に楽しめました。米・肉・魚・ビール・ワイン・野菜・果

物、どれも日本の価格とは比較にない安さです。もっともレストランなどでは、信じられない程まずく調理したものを法外な値段で食べさせられます。我々は各地のレストランや魚屋に日本人の好む魚種、調理法を教える事により、快適な生活を次々にものにして行きました。

(4) クリスマス休暇

我家では年末の一七～八日頃子供の夏休みが始まるのを待って、長い休暇をとりました。

一年目の夏は行ったばかりでしたので、家から百km程の海岸の町に三泊した程度でしたが、二年目はシドニーまで九泊一〇日のドライブ、三年目はニュージーランド南島へ、四年目は大陸を北上してクイーンズランド州グレートバリアリーフに熱帯のクリスマスを楽しみました。

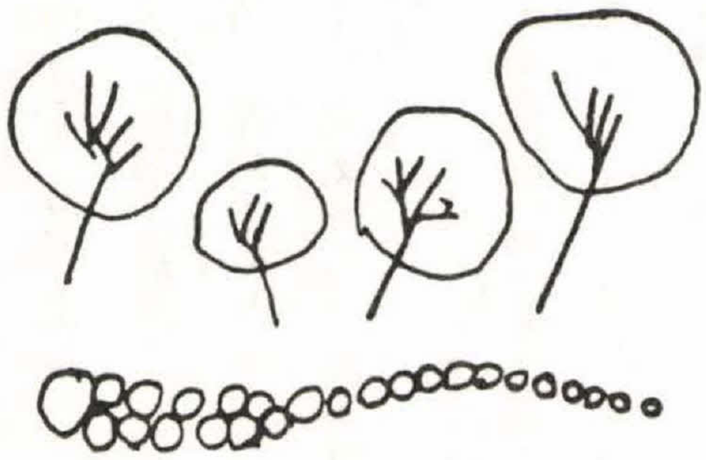
ニュージーランドでは軽飛行機によるマウントクック一周と言うスリリングな体験がありました。悪天候続きでそれまで二〇日間全く飛べなかったと言う八人乗りのセスナに、オマーンから来たと言う石油成金の四〇男と、豪州シドニーからの騒々しい母子に、我家の四人が乗り込みました。離陸した途端に、それまで後部座席で興奮していた母親がだまり込み、やがてゲー始めました。大変な乱気流で私自身も生きた心地はありませんでしたが、眼下に広がる氷河地形の素晴らしい景観は今でも忘れません。恐がって座席にしがみつく息子共に「窓の外をみろー！」と叫び続けた事も思い出されます。通常は氷河の上に一回着地するそうですが、さすがにそれは差し控えたようです。

(5) 日本に帰って思う事

日本に帰ってからの私は、良くあるように海外関係の担当と言う事で、ドイツやアメリカに行ったり他の外国の話を良く聞く事があります。昨年九月デュッセルドルフに行った時、ユキさんに（S四一年卒佐藤之敏氏）一八年振りに会いました。ユキさんは駅裏のアパートに気ままな一人暮しで、おでんを作って歓待してくれました。

色々と見聞するなかで日本あるいは日本人というものを外から見る、あるいは外国との比較において視ると言う事が習慣となり、日本の現状に対して考えさせられる事も多くあります。

これが私の近況報告ですが、針葉樹会報にのせるには場違いなほどこのところ山からは遠ざかって来ました。先日、我家から近い奥武蔵の山を、家族でハイキングに行って来ました。二人の息子が思いの他、元気で楽しんでくれましたので、今後しばらくは週末毎に、低山歩きをやる事になるでしょう。



三月の守門岳

佐藤　活朗

奥只見の周辺には高さは低いが、形の良い面白そうな山がいくつかある。春分の日の連休に中島、倉知、近藤（泰）の諸氏とそのうちのひとつ、守門岳に向かった。

只見線の大白川駅から三月二一日の昼過ぎに歩きだした。二メートルに近い残雪があるものの、五月のような陽気で、スキー場まで約一時間の道はきれいに除雪されていた。

大原スキー場は連休とはおもえぬ程空いている。ここで今夜は泊まってスキーを楽しみ、明日頂上往復との案もでたが、まずは原案通り稜線までテントをあげることにする。

リフトを二本乗りついで、守門岳の頂上から南西にのびている主尾根の側稜に向かってスキーで歩き始めた。雪は春の残雪という感じに良くしまっていて、ほとんどスキーはもぐらない。やはり、この冬の積雪は少なかったようだ。今回のために購入した張り付け式のシールが威力を発揮する。学生の頃から愛用のナイロンシールとは、まるで別の道具という感じである。

稜線につきあげる登りは段々急になり、スキーをせおって、わかんで登降した人々のトレースをたどって歩くことにする。三時間弱で稜線上の約一二〇〇メートル地点についた。ここにテントを張り、こよいの宿とする。ビールを飲みながら眺める只見、奥会津の山々の眺めが素晴らしい。

明けて二二日、心配された天気もまずまず晴れている。六時五〇分テントを出発する。僕のスキーの締め具の具合が悪いので、スキーを背負って歩くが、スキーで登る三氏とスピードは同じくらいである。そこだけガスに包まれた頂上（一五三七メートル）にわりとあっけなく一時間で着いた。さすがに寒い頂上を早々にあとに、スキーを着けて滑降にかかる。

なだらかに広がったまばらに木のある尾根は四年ぶりのスキーである僕には調度良い容易さである。テントを撤収して、稜線をそのまま西にたどりつづける。藤平山（一〇二七メートル）を過ぎると地形が複雑になり、地図を出して会議する。結局よくわからないながら、部落がすぐ下に見えることもあり、直進する尾根を進む。

この辺からルートを間違えたようだ。尾根はすぐに急になりスキーでは無理となったため、やむなく右にトラバースして広い沢に出る。上部は急な、少し嫌な斜面なので慎重にキックターンで、下部はボーゲンで各人思い思いに転びながらも快適に滑る。その後は平らになり、早くもところどころ地面をのぞかせた田んぼの間をぬって村落に着いた。

村の人に僕たちは、「ここはどこですか？」と聞いた。どうやら上で迷った所で、やはり右の尾根を行くものであったようだ。

スキーをぬいだのが一二時、そこからは村を通る除雪された道路を一時間で入広瀬の駅に着いた。

振り返ってみると、守門岳は山スキーとしては手ごろな、楽しめる山といえる。帰路、上越線ぞいの山々を眺めながら、心はすでにつぎのスキー山行に飛んでいた。

懇親山行記（金峰山）

宮下　克彦

朝起きてみると、昨日までとは打って変わって曇天であった。「まあ、雨なら雨で、一日中山小屋でゴロゴロしていればいいさ。」こんな軽い気持で韮崎に向かった。

昨日の電話での最終確認によると、参加予定のOB諸兄は、全員正午過ぎの瑞牆山荘到着予定とのこと。当初予定していた第一日目の瑞牆山往復は断念、明日金峰山登頂後、余裕あれば瑞牆山往復を付け加えることとした。

甲府駅で特急を降りると、偶々、引地さんと合流した。韮崎までは各駅停車に乗った。旅の旅情を味わうのは鈍行に限る。駅の掲示板に「韮崎高校サッカー部試合日程」が堂々と貼られているのにはいささか驚かされた。

韮崎からはタクシーで一路瑞牆山荘へ向かった。このタクシーがかなりの年代物で、山荘まで惰眠を貪ろうとの考えを、挫折させるに十分な乗心地ではあったが、山行と銘打ちながら今日は一歩も歩かないのだから贅沢は言えないと変に畏ってしまった。

山荘に到着すると、既に根本さんと望月（敏）さんがみえていた。特に望月さんは当初の予定通り、午前中には山荘に到着していたとのこと。幹事の怠慢さを深謝した次第であった。「連休前後は混みますから、事前に予約をして下さい。」との山荘側電話での弁とは裏腹に、本日の宿泊予定者は我々七名の他は、ドイツ語を話す外人さん（ドイツ人？）とそのガイドらしき年配の日本人の二名だけであった。したがって一五～一六畳はある大部屋一つは我々七名の貸切りと相成った。瑞牆山荘は、当方が「山小屋」をイメージしていただけに、予想以上に立派で風呂まで完備されていた。

部屋にはまだストーブが焚かれており、春とはいえやはりここは山の中なのだと変に納得してしまった。望月さんは午前中に着いたこともあり、既に富士見平まで往復してきたとのこと。早速地図を拡げ明日の予定を検討するが、とにかく金峰山登頂を最低目標とし、あとは明日の天気待ちということにした。

佐藤（活）さん、金子さんの到着を待って山荘前をぶらぶらしてみるが、なかなか現われないので散歩がてら登山道に入ってみた。山道を行くとガイドブックに書かれていた通り急な登りとなった。引地さんは軽快に登っていくのに比べ、当方は息も絶え絶え。明日の金峰山登頂に対し大いに不安を抱いた。

結局、富士見平下の見晴台で引返すこととした。見晴台からは瑞牆山南面の山容が良く眺めることができた。山頂付近にさえほとん

ど雪は見当たらず、アイゼンを持参しなかったのは正解であったと思った。

山荘に引返すと、既に夕食の準備が整っていたが、金子、佐藤両OBはまだ到着しておらず、根本さん、望月さんも心配そうに山荘前で両氏の到着を待たれていた。午後六時頃まず佐藤（活）さんが、御友人の田崎さんと共にエンスト寸前の車に乗って到着。帰路は絶対にタクシーにしようとは迎えた四名の共通する処であった。追って金子さんが自慢のオートバイで颯爽と登場。やっと七名が相まま見えることとなった。

今回特別参加の金子・佐藤両OBのジョギング仲間である田崎さんからの差入れを交え夜食は大変豪華なものとなった。食後は部屋に戻って酒を酌交しながら四方山話に興じ、明日の好天を念じて床に着いた。

翌二六日も相変わらず曇天であったが、とりあえず雨が降っていない為、予定通り金峰山へ向かうこととした。朝食の折、望月さんより横山前会長（在中国）の中国土産である。ローヤルゼリーを頂き、なんとなく今日は行けそうな気がして来た。

六時四〇分山荘前発。根本、望月両OBは、昨夜、酒宴時の話題の主役たる金子OBのオートバイにより富士見平へ直行。佐藤・田崎・引地・宮下の四名は山荘前より登高開始した。見晴台までは昨日同様かなりの急登が続き、早くも息切れをする始末であった。

見晴台からは緩かな屋根道となり、富士見平で、根本・望月・金子の三氏と合流、いわく付きの富士見平小屋より瑞牆山への道を左に分け金峰山へ向かう。

樹林帯の中につけられた緩やかな屋根道を行くが、薄暗く眺望も悪く、楽ではあるが決して快適とはいえない登高が続いた。

八時、大日小屋着。全員快調にて金峰登頂を確信する。大日小屋を過ぎる辺から、佐藤・引地・宮下の三名が先行することとした。またしてもじめじめとした原生林の中を登っていくとやがて、ゲレンデを思わせる大日岩の基部に到着。ガイドブックによると、ここからは南アルプス、八ヶ岳が望めるとのことであったが、あいにくの曇天でなにも見ることはできなかった。それでも金峰頂上からの雄大な眺望に期待し山頂へと向かった。

引続き樹林帯の中を行くが、困ったことにこの辺より登山道に残雪が目立ち始めた。悪いことに雪はこのところの好天で溶けそれが夜凍る為か、表面が氷化しており、登りにくいことこの上なかった。

よたよたと危なっかしい登高を続けていると、やっと森林限界を突破して金峰山へ続く稜線に出た。ところがこの頃より濃いガスまじりの強い風が吹き始め、視界は極端に悪くなり、加えて稜線は完全に雪に覆われていた。状況は一度に「春山」と化してしまった。それでも樹林帯の中の氷雪よりはずっと歩き易い雪の上を着実に行き、一〇時一〇分金峰山頂着。五丈岩の基部に風を避けて、昼食をとった。風はいよいよ強く、期待していた頂上よりの眺望などは望むべくもなかった。

一一時頃、根本・望月・金子OBと田崎さんの四名が元気に頂上に到着。全員で登頂を祝った。

頂上の寒さに絶え切れず、佐藤・引地・宮下は一足先に下山の途についた。帰路は樹林帯の中の氷で何度も転びそうになりながら、一気に駆け下った。

午後一時富士見平小屋着。瑞牆山往復も可能な時間帯ではあったが、雨が降り始めたことと、再度氷の上を歩かねばならぬことを考えて、このまま瑞牆山荘へ下ることに決定。

午後一時二〇分、山荘着。約二時間程後、他四名も無事山荘着。ビールで登頂に対し乾杯し、散会とした。

今回は、山行計画の通知から山行日までの間にやや時間的余裕を欠いた為、先約済にて残念ながら不参加となったOB諸氏も多く、次回よりは前広に通知すべく努める所存ですので多くのOB諸兄の積極的参加を期待いたします。

〈山行日時〉昭和六二年四月二五日・二六日

〈山域〉　奥秩父・金峰山

〈コース・時間〉

四月二六日（日）

瑞牆山荘（六時四〇分）—富士見平小屋（七時二〇分）—大日小屋（八時）—金峰山頂　着（一〇時一〇分）—同発（一一時二〇分）—大日小屋（一二時）—富士見平（一三時　）—瑞牆山荘（一三時二〇分）

〈参加者〉

根本　大（昭一七卒）・望月　敏治（昭二五卒）・金子　晴彦（昭四六卒）・佐藤　活朗（昭五三卒）・引地　真（昭五五卒）・宮下　克彦（昭五七卒）・田崎（特別参加）

今年卒業して新しく針葉樹会に迎える白石さんから、ヒマラヤ・トレッキングに出掛けた際の印象をいただきました。白石さんは昨年春にアンナプルナ一周、そして今年は、卒業前にエベレスト街道へと、学生時代に二度のネパール・ヒマラヤトレッキングを経験しました。若い時の経験は何物にも替え難いものであり、また、一味違った感想が聞けるものと思います。

ネパール・トレッキング留意点

白石　章治

旅の始まりは旅の仕度から始まる。前回のアンナプルナ一周トレッキングの経験から、多くのことを学んだ。荷物の軽量化は当然のことだ。必要最少限のものを持っていくこと。無駄なものは持っていかないことが肝要だ。わざわざ旅行のために新調する必要などない。買いたいものがあれば、カトマンドゥに飛ぶ途中、香港経由で香港でそろえればよい。そろわぬものなど、もちろんないし、価格も日本より安い。日本で買えば一万円以上するスニーカーも香港では四、五千円程度だ。

衣類も安い。安い香港製の品質は、日本のそれよりやや落ちるが、ヨーロッパのブランド物もかなり安い値段だ。一般にスポーツ用

品は、まだまだ欧米の方が進んでいるように見うけられた。

デザイン的にも、使い易さでも、堅牢さの点でも、欧米に学ぶべきことはたくさんあるような印象を受けた。EC諸国との貿易摩擦が問題となっている今、輸入するものはたくさんあると感じた。

しかし、日本の物価は高すぎる。ある程度の買い物をするなら、香港で買えば、旅費を払ってもおつりがくる。

海外通の諸先輩ならすでに御存知のことであろうが、航空券ももちろん安い。成田—香港間の格安航空券の一年有効のオープン・チケット往復で、日本では七～八万円前後である。香港では三～五万円前後である。JALも他の航空会社の料金と変らない。日本で買う金を使えば、ビジネスクラスに乗れる。

若者の貧乏旅行者の間では、日本に帰る直前に香港に寄り一年オープンのチケットを買って帰るのが常識となっている。

しかし、成田—カトマンドゥは、直行便はないので、香港かバンコックに立ち寄ることになるが、日本で買っても香港・バンコックで買っても、それほど値段が変らないので日本で買って行った方が楽だ。インド航空とロイヤル・ネパール航空の組み合わせで、一年間オープンで一三万五千円のチケットを僕は購入した。相場は季節にもよるが、一二万から一六万程度だといわれている。

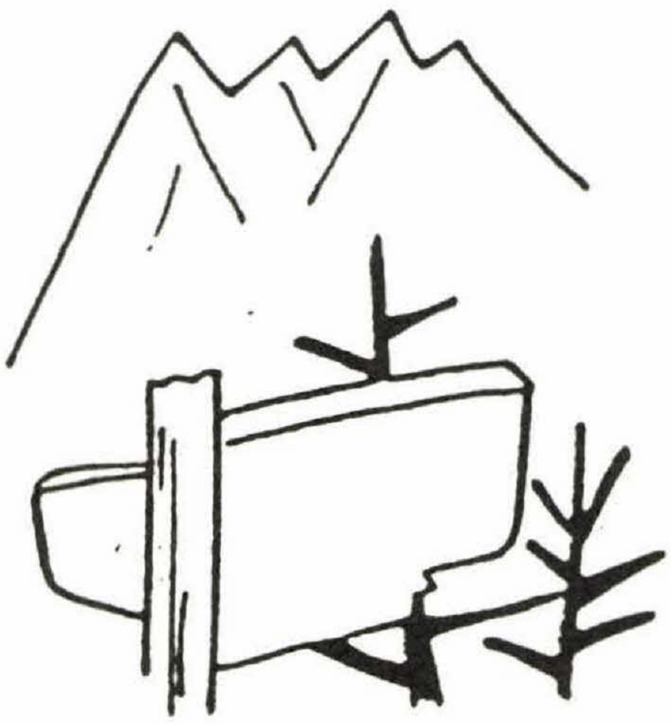
話は装備の件に戻るが、カトマンドゥ市内には、中古の登山用品店が多く、レンタルすることもできるし、購入もできる。各国の遠征隊が残した装備が、カトマンドゥリタメール地区で売られている。ポカラやナムチェ・バザールにもあるが、品質・値段とも考えて、カトマンドゥで買う方がよい。

羽毛のシュラフや羽毛服は豊富である。ダウンジャケットで一日あたり六～一二ルピー、シュラフで八～一五ルピー程度で借りることができる。クリーニングもしてあって物も悪くはない。

何軒かまわって交渉すれば多少の値引きもしてくれる。保証金で一〇〇米ドル程度デポジットすることが必要だが、必ず返してくれる。かなり汚して返しても、穴をあけたり破かなければ全額バックしてくれる。日本から持ってくるより、経済的にも重量の点から考えても、レンタルの方がベターのようだ。

トレッキングの成功のためには、足まわりに十分気を使わねばならない。靴と言えば、登山靴を想像されるだろうが、年間を通じて一般的なトレッキングコースだと登山靴の必要はない。今回は一月の末から二月の中旬にかけて、五五四五mのエベレストの展望台カラパタールと、五三六〇mのゴーキュ・ピークに立ったが皮製のトレッキングシューズで十分だった。

春や秋で四〇〇〇m以下の所を歩くのであればスニーカーでも事が足りる。しかし、御



存知の様に足首を保護することを考慮すると、ロング・ブーツが望ましい。大事なことは、はきなれた靴をはくことである。足にまめができたりすれば、長いトレッキングであれば一歩一歩が苦痛である。せっかくの美しい風景も台無しになりかねない。バンドエイドはもちろん必携である。靴は一足で十分である。現地でサンダルを買うのがよい。一〇ルピー（七〇円くらい）で丈夫なものが買える。帰りは捨てて帰ればよい。たぶん誰かが使うだろう。

使い捨てと言えば、私の場合、下着も買っては捨てていた。日本を出る時に、一番ボロのパンツを二、三枚持って出て、汚くなってきたと思ったら洗濯せずに捨てる。現地でも十分使用に耐えるようなものが、非常に安く売っているからそれを買えばよい。カトマンドゥのホテルだと大抵ランドリーサービスもありこれも安い。しかし、洗い方が強力なのであまりいいものは出せない。足でふみつけたりたたいたりして洗うので、きれいにはなるが生地が痛む。無精者の私にとって、やはり洗濯は面倒だ。汚れたパンツを洗うより、耐えられなくなるまで、はき続ける方を選択するのだ。

ここまで書いて、諸先輩の中には、ある意味で日本の経済力に頼った旅行の仕方に、反発を覚える方もいらっしゃると思う。実際に円は強い。ドル建のトラベラーズ・チェックにかわって、円チェックを持って行く方が今や主流になりつつある。通常のバンクで両替するのであれば、円チェックもかなりの流通性を持っている。

インフレ経済をとっているネパールで物価上昇分を補っても、旅行者にとっての円高のメリットは十分ある。戦前の日本の中流家庭にあたると思われる家の月収が、ネパールでは一〇〇〇ルピー（＝五〇US$＝七〇〇〇円）程度であろう。

今回、私が泊ったホテルは、いつでもたっぷりお湯の出るシャワーが使え、しかも、毎日ベッド・メイクに来るという清潔なホテルで、五〇ルピー（＝三一〇円）程度だ。物価はもちろん上昇しているが、前回より安くなったという印象さえ受けた。

だからと言って、何でも安い、安いと言って、金にまかせて旅行をしていたわけでもない。ましてや香港あたりに生息する、ハイエナのように、高級ブティックで、まるでスーパーで野菜でも買うかのごとく買い漁っていた日本人の買い物好きのGALとも違う。少なくとも、自分の持っている金がネパール人にとって、どれ程の大金であるかは自覚していた。一部のアメリカ人と大半の日本人のように、経済力にまかせて、あれこれ買いあさり、うまいものを食って、楽な旅行をするのも自由である。

嫌悪感を感じる方もいらっしゃるだろうが、実際私も終戦後のアメリカ人が、日本人に対して持った種類の感情と共通するものを、ネパール人に対して持っていたであろう。それがある種の快楽だとさえ感じた時もあった。

成金国家の国民が海外に出た時に感じる根の暗い快楽に溺れるのは根の暗い若者にまかせるとして、そこから脱して建設的に考えたい。

もう一歩踏みこんだおもしろさを発見するためには、現地のネパール人と言わないまでも、西ヨーロッパ諸国の旅行者に近い金銭感

覚を持つことが旅を楽しむコツでないかと思う。彼らの金に対するセンスは、シビアではあるがリーズナブルである。しかも徹底している。まず、無駄なものは買わない。買う前には十分リサーチして、仲間同士で情報を交換し合う。だから必要な情報は彼らからもらった方がよい。日本人の情報より、新鮮で正確だ。日本人の情報は、一般に古くて、また聞きが多いため、非常に歪曲化されている例が多い。言葉の問題のせいだろうが、日本人の情報は日本人の間だけで流通するため、よどんでしまう。

更に悪いことは、情報の歪曲化が悪い方に誇張される。自己防衛本能が強い国民性のためであろうか。だから、余程ひどいことが言われていても鵜呑みにせず、直接行って来た人間の話しか信用しないことが大事である。十分な準備をして自分で実際に行ってみるのがベストだと思う。

ガイドブックに関しても、日本のものはよくない。「ブルーガイド」は情報が古過ぎるため、ほとんど現地では役に立たない。今、若者の間でよく利用されている「地球の歩き方ネパール編」もガイドブックとしてはお粗末だ。まず、旅の精神だか哲学だか知らないが、精神訓話が多すぎる。印象や情緒に流された情報が多く不正確である。毎年改訂するのに、五年も前の話が多数掲載されている。何よりも問題なのが、旅行者からの投稿という形がとられているために、情報の統一性がまったくないし、私の知る限りでも事実とは程遠い文章が、さも本当らしく語られている。日本語のガイドブックで一応の信頼性を保っているのは、故中野融氏の「TREKKING IN NEPAL」(山と渓谷社)だ。この本はカラーの写真集という体裁をとっているため、ヴィジュアルな面でも楽しめるし、取材が丹念なために実際のトレッキングに非常に有効だ。しかし、残念なことに、写真集であるため重いし、コンパクトさに欠けるため、自分の行くところだけコピーして持っていかねばならない。また、活字情報の少なさにも問題がある。この本は英訳もされており、カトマンドゥ市内で手にはいる。

世界中のトレッーカーに信頼され、かつ利用されているのは、ロンリー・プラネットシリーズの「Trekking in the Nepal Himalaya」である。ネパール・ヒマラヤをトレッキングする前にこの本を一読されることを是非お薦めしたい。この本を読んで始めて、日本のガイドブックのレベルの低さを痛感した。

カトマンドゥ市内でトレッキング会社を経営する若者が責任をもって執筆し、旅に関するあらゆる情報を網羅している。きちんと改訂版が出されるため、情報も正確で新しい。ややマニュアル的な部分も多いが、情報の量、質ともに、日本のガイドブックのはるかに上をいっている。日本と欧米の文化的な水準の格差をつくづく納得させられるガイドブックだ。このシリーズはインド・ヒマラヤ編も出

版されている。日本編もあり、日本を再発見する楽しみもある。

ガイドブックと共に旅の手引きをしてくれるのが、シェルパである。今回初めてシェルパを雇った。人を使うということは本当に難しい。特に、言葉の問題と社会環境の違いから生ずる、コミュニケーションのギャップを丹念に解決していかねばならない。

まず、一日の日当を決めること。それに食事代を含めるかどうかと言うこと。その食事の内容、装備の問題などが生じる。

私が雇ったのは、ヘンドルティという名前の生粋のシェルパだった。彼は四五才になるが妻も子供もいない。三〇代から一〇年間中国のチベットにいたらしく、中国語はできるが、あとはシェルパ語しか話せない。だから、英語とシェルパ語のできる代理人をたてて初めの交渉をしたのだが、トレッキング中は、片言のシェルパ語だけなので、ほとんど意志疎通は手ぶり身ぶりだ。

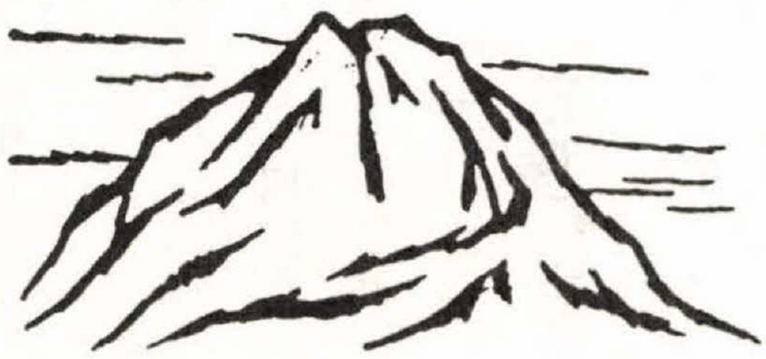
ナムチェからゴーキュの往復まではうまくいったが、ルクラまで行く約束が、私がナムチェで金を払ってしまったので、結局ナムチェからルクラまで行くことを渋りだした。特別のボーナスを要求してきたのでキャンセルした。金はやはり最後の最後に払うべきだったと後悔した。トレッキングがうまくいっただけに心残りだった。

長いトレッキングの場合、シェルパのことも含めて、誰と行くかということも問題だ。日本人はよく男性のグループで来ているが、それより一人で行った方がよい。一人で行けば、それだけ人と知り合う機会も増えるし、当然、ネパール人、欧米人の友達もたくさんできる。彼らだって日本人に強い関心を持っている。日本人だけで固まってばかりいないで、できるだけ欧米人のグループやネパール人の家庭に融け込んで行った方がおもしろい。

ネパールに限らず、アジアにおける日本人の立場は不安定なものだ。ネパール人は日本人と顔が似ているので非常な好意を抱いてくれる。

しかし私は時々、彼らの好意を裏切っているような罪悪感にとらわれていた。生活とはまったく遊離したレベルで、彼らの生活に土足で踏みこむ旅行者としての自分。彼らの好意を結局漫遊記的な好奇心を満たす手段として利用した。

彼らにとっては想像もできない大金を持った若者が、使うだけ使って、食うだけ食って、飲むだけ飲んで、写真を撮るだけ撮って行って帰って来たという印象さえ、自分の旅行について感じた。旅をするということは、動機も個人的であるから、帰するところもその人間自身に戻る。未熟な人間の未熟な旅の雑駁な感想である。拙い文章であったが、一読されて、諸先輩の用に具するところがあれば幸いである。



会務報告

新入会員（昭和六二年卒）

白石　章治

勤務先　〒八一〇

福岡市中央区天神二—六—一

NHK福岡放送局放送部

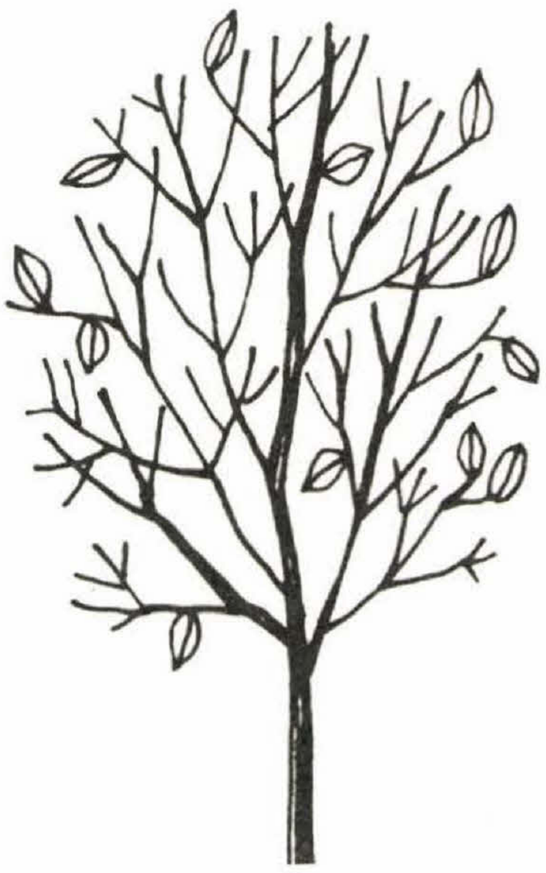
Tel　〇九二(七七一)一一二一

自宅　〒八一〇

福岡市中央区桜坂二—一〇—二四

グリーンコーポB—一

Tel　〇九二(七八一)〇九七五



会務連絡

代表幹事および保険幹事の異動にともなう会務臨時代行についてのお知らせ

今春、佐藤久尚代表幹事および石丸義男保険幹事の人事異動にともないそれぞれ、宮武幸久氏(昭和四五年卒)、宮下克彦山行幹事が総会までの期間臨時に会務を代行いたしております。何卒ご了承の上、ご協力方お願い申し上げます。なお、連絡先は左記のとおりです。

連絡先

宮武幸久臨時代表幹事

〒二八一

千葉市花園五—一七—一六

旭硝子花園荘二棟四〇二号

Tel　〇四七二(七五)三四一四

〔勤務先〕　旭硝子東京支店

Tel　〇三(二八三)九四二七

宮下克彦臨時保険幹事（兼山行幹事）

〒二七三

船橋市前貝塚二六六—三

三井物産船橋寮B—四〇三

Tel　〇四七三(三八)五六九一

〔勤務先〕　三井物産厚板貿易部

Tel　〇三(二八五)二四六三

佐藤久尚氏連絡先

The Export-Import Bank of Japan
Representative Office In New Delhi
Suite No.102 of Hotel Ambasador,
Sujan Singh Park,New Delhi-
110003 India
Tel New Delhi 699258(direct)

石丸義男氏連絡先

Mitsui&Co.Ltd.Seoul Branch
9th Fl.the Korea Press Center Bldg.,25,
1-Ka,Taetyung-Ro.Chung-Ku.
Seoul.Republic of Korea
Tel (739)0651～4

編集後記

前幹事より引き継いで、三回めの会報の発行となります。なんとかこのペースで発行を続けたいと思いますので、皆様方のご協力をお願い致します。近況報告等ございましたら、左記宛お送り下さい。

〒一六七
東京都杉並区南荻窪三―二九―二三
三菱倉庫荻窪寮
引地　真

尚、次号は十月発行予定。原稿は成るべく八月末までに届くようお願い致します。

（引地）